

伝統工芸士の職業継続要因と スキル習得に関する研究

成田智恵子*・来田宣幸*

Study on Occupational Consciousness and Skill Acquisition of Traditional Craftspeople

Chieko NARITA* and Noriyuki KIDA*

This study aimed to clarify the influence of skill acquisition on occupational continuation factor of traditional craftspeople, and to clarify the influence of position and work content on the continuation factors and skill acquisition. A questionnaire survey was provided for 61 traditional craftspeople, and factor analysis, multiple regression analysis, and analysis of variance were performed. As results, talent and ability, adaptability to traditional crafts, environment, and enthusiasm were extracted as the continuation factors. Additionally, traditional craftspeople had different thoughts on skill acquisition method by the difference of the position and work content.

key words: traditional craftspeople, occupational consciousness, skill acquisition

問題の所在と研究目的

近年、様々な分野において優れたパフォーマンスを発揮する熟達者の熟達化に大きな関心が寄せられている（金井・楠見, 2012; 北村, 2008）。その一方で、熟達者の職業に対する達成動機や職業観に関しては十分に議論されていない。専門性の高い分野ではスキルが求められながらも人的資本スキルに対する保険が成立しにくい（市田, 2012）。そのため、熟達化を考える上ではスキルのみならず、熟達者の職業継続要因を明らかにすることが重要である。

本研究では産業的減衰により職業継続が困難となっている伝統工芸士に着眼する。工芸や職人のスキルの熟達は芸術やスポーツと同じ区分として捉えられている（田柳・平田・竹川・椿本, 2014）。しかし、経営者の職務の有無によって職人の職業に対する認識には差異がある（町田・小林・宮, 1997）。工芸は分業制が多いため、仕事内容の違いについても考慮する必要があるが、仕事内容の観点から職人の職業に対する達成動機や職業観、スキル習得を論じた研究は見られない。そこで本研究では長期に渡り仕事を続けてきた伝統工芸士を対象とし、職業継続要因に対するスキル習得方法の影響を明らかにすることを目的とする。また、継続要因とスキル習得方法に対する経営者の職務の有無と仕事内容の影響についても検討を行う。

方 法

調査対象者・時期 2014年4月に京都府仏具協同組合に所属する伝統工芸士105名中61名に調査を行い、記入

もれなどを除いた55人（有効回答率90%）を分析対象とした。分析対象の内訳は男性50名、女性2名、不明3名であり、平均年齢59.9歳（SD=12.8）であった。経営者の職務を有する者は37名、経営者以外が15名、不明3名であった。仕事内容は不明1名を除き、土台作りなどの基礎的な要素が強い土台制作群が34名（漆工芸7名、金属工芸11名、木工芸7名、箔押し7名、表具2名）、加飾などの応用的な要素が強い加飾・応用制作群が20名（時絵4名、木彫刻3名、仏像彫刻6名、鋳7名）であった。

調査内容・分析方法 職業継続要因（20項目）とスキル習得方法（21項目）の質問紙を作成し、各項目に対し、「そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わない」の4件法にて回答させた。得られた回答に対してそれぞれ因子分析を行い、スキル習得方法の下位尺度得点が職業継続要因に与える影響を重回帰分析（ステップワイズ法）にて検討した。また、各得点に対して経営者の職務の有無（2水準）と仕事内容（土台制作群と加飾・応用制作群の2水準）を被験者間因子とする2要因分散分析を行った。

結果と考察

職業継続要因について、因子負荷量の値に基づいて項目を選定した上で再度因子分析を繰り返したところ、初期解での固有値の減衰状況と解釈可能性から4因子が抽出され、第1因子から順に「自己の資質・能力」「伝統工芸への対応力」「継承環境」「熱意」と命名した（Table 1）。また、スキル習得方法についても、第1因子から順に「観察的習得」「自発的習得」「基礎的習得」「理論的習得」と命名した（Table 2）。

重回帰分析の結果（Table 3）、「観察的習得」と「熱意」に有意な正の回帰係数が得られたことから、観察による習得を行った職人はやりがいなどの好意的な感情を継続要因として考えていた。「自発的習得」と「自己の資質・能力」「継承環境」「熱意」にそれぞれ有意な正の回帰係数が得られたことから、自発的な習得を行った職人は本人の能力や意志以外にも継承環境を継続要因と考えていた。また、「継承環境」の下位尺度の構成項目から、「自発的習得」には他者への継承の観点も含まれている。「基礎的習得」と「伝統工芸への対応力」に有意な正の回帰係数が得られたことから、「教えられた通りに技能を身に付ける」などの習得を行った職人は、「需要に合わせた仕事ができた」ことを継続要因と考えていることが示された。「理論的習得」と「熱意」に有意な負の回帰係数が得られたことに関しては、一見理論的なスキル習得が仕事への好意的な感情に否定的な影響を与えるように思われる。技術に先行した知識の取得は技術向上の妨げとなる可能性がある（岸, 2011）。しかし、知識の獲得は自己の能力を再確認することにもつながるため、知識の獲得を通じて自らのスキルと知識の差や他者と自己との差を感じる場合に「熱意」に影響が生じると考えられる。

2要因分散分析の結果（Table 4）, 経営者の職務にある職人はない職人に比べて「自発的習得」「基礎的習得」「理論的習得」が有意に高い値であった。ゆえに、経営者の職務にある職人は教えられた通りに仕事をしながらも、自発的に工夫し、理論的に知識を身に付けてきたといえる。先行研究では経営者の職務の有無による職業に対する認識の差異が指摘されていたが、本研究ではスキル習得方法にも差異があ

* 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute
of Technology, Matsugasaki, Sakyo-ku, Kyoto 606-8585, Japan

Table 1 職業継続要因の因子分析表

項目	F1	F2	F3	F4
第1因子 自己の資質・能力 ($\alpha=.86$)				
実力があるから	.93	-.05	-.05	.08
才能があるから	.80	.06	.01	-.08
伝統の技術に自分なりの工夫を加えてきたから	.71	-.13	.12	-.07
自分の技能や作品を他者にアピールする能力があるから	.61	.19	.13	.09
第2因子 伝統工芸への対応力 ($\alpha=.76$)				
需要に合わせた仕事ができるから	-.11	.73	.15	.06
仕事量があるから	-.05	.58	-.03	.01
伝統工芸であるから	-.05	.58	-.03	.03
コミュニケーション能力があるから	.37	.57	-.05	-.17
自分の技能や作品が社会に求められているから	.19	.51	-.11	.19
第3因子 継承環境 ($\alpha=.67$)				
人間関係に恵まれているから	-.15	.26	.86	-.07
後継者を育てたいから	.18	.06	.57	.00
自分の技能に満足することがないから	.20	-.32	.49	.10
第4因子 熱意 ($\alpha=.76$)				
仕事へのやりがいを感じているから	-.04	.16	-.12	.98
この仕事が好きだから	-.01	-.16	.37	.60
因子間相関				
F1	.56	.35	.39	
F2		.39	.28	
F3			.30	
最尤法, プロマックス回転				

Table 2 スキル習得方法の因子分析表

項目	F1	F2	F3	F4
第1因子 観察的習得 ($\alpha=.89$)				
他の人の技を観察した	.97	.00	-.05	-.02
製品や作品を観察した	.84	.04	.12	.04
第2因子 自発的習得 ($\alpha=.73$)				
技能者に教えられたことをもとに、自分で工夫して技能を身に付けた	.15	.87	-.22	-.15
仕事以外にも自主的に練習をおこなった	-.25	.68	.23	.09
美術館・博物館に行き、作品を鑑賞した	.06	.48	.35	-.04
独自に技能マニュアルを作成した	-.08	.43	-.09	.32
第3因子 基礎的習得 ($\alpha=.55$)				
技能者に教えられた通りに技能を身に付けた	-.01	-.15	1.07	-.08
ひたすら仕事をこなした	.22	.06	.36	.14
第4因子 理論的習得 ($\alpha=.58$)				
技能よりも知識や理論を優先的に身に付けた	-.01	-.12	-.05	1.05
仕事に関する本や文献などを読んだ	.18	.23	.10	.33
因子間相関				
F1	.08	.01	.09	
F2		.47	.39	
F3			.21	
最尤法, プロマックス回転				

Table 3 職業継続要因とスキル習得方法の関連

	標準偏回帰係数 (β)			説明率 (R^2)
	観察的習得	自発的習得	基礎的習得	理論的習得
自己の資質・能力		.467**		.203**
伝統工芸への対応力			.438**	.177**
継承環境		.314*		.081*
熱意	.353**		.608**	-.346**

* $p<.05$, ** $p<.01$

ることが示された。理由としては、地場産業の技能者と経営人材にはそれぞれの育成制度や技能伝承の方法があるためと考えられる(加護野, 2007; 山田・伊藤, 2013)。

仕事内容に関して、土台制作群は加飾・応用制作群と比べて「観察的習得」が有意に高い値であったことから、土台作りなどの基礎的な要素が強い土台制作群は観察を重視したスキル習得をしているといえる。仏壇・仏具制作の土台制作群の仕事内容は定型なものが多いため、既存の型を踏襲するために観察による習得が重視されていると考えられる。一方、加飾・応用制作群は図案の制作など意匠性の求められる仕事と比較的多く、展開の要素が強いため、

Table 4 職業継続要因とスキル習得方法に対する経営者の職務の有無と仕事内容の影響

	経営者の職務有		経営者の職務無		主効果		
	土台制作群	加飾・応用制作群	土台制作群	加飾・応用制作群	経営者の職務の有無	仕事内容	交互作用
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	F 値	F 値	F 値
職業継続要因							
自己の資質・能力	2.4 (0.6)	2.6 (1.0)	2.1 (0.6)	2.1 (0.4)	2.336	0.283	0.219
伝統工芸への対応力	2.3 (0.5)	2.5 (0.8)	2.0 (0.8)	2.4 (0.2)	1.098	2.727	0.393
継承環境	2.6 (0.6)	2.6 (0.8)	2.9 (0.5)	2.5 (0.4)	0.321	0.69	0.917
熱意	3.0 (0.9)	3.4 (0.6)	3.1 (0.9)	2.8 (0.6)	0.633	0.076	1.636
スキル習得方法							
観察的習得	3.5 (0.7)	3.3 (0.6)	3.7 (0.4)	2.9 (0.2)	0.411	6.576**	2.30
自発的習得	3.0 (0.7)	3.1 (0.6)	2.0 (0.5)	2.8 (0.4)	9.687**	6.2*	2.57
基礎的習得	3.1 (0.7)	3.2 (0.5)	2.3 (0.9)	2.7 (0.5)	9.207**	1.406	0.50
理論的習得	2.6 (0.7)	2.5 (1.1)	2.0 (0.4)	2.1 (0.6)	4.301*	0.021	0.14

* $p<.05$, ** $p<.01$

加飾・応用制作群は「自発的習得」が有意に高い値であり、自発的な工夫からスキルを習得していることが示された。

職業継続に成功している伝統工芸士は伝統工芸への対応力を重要と考えており、そしてその考えには基礎的習得が影響を与えているということが示された。この点は、反復などの基礎的なスキルの上に応用を考えることの重要性を示しており、今後の産業の在り方を考える上で非常に重要である。また、これまでは産地の違いから伝統工芸士の認識の違いを論じる研究が多かったが、本研究の結果は経営者の職務の有無と仕事内容の違いがスキル習得方法に対する考えに影響を与えることを示した。さらに、調査対象者に本研究の結果に対する聞き取り調査を行ったところ、現代の需要に合わせた伝統工芸の重要性や経営的視点を持った職人の必要性など今回の結果を裏付ける意見が得られた。本研究の限界として、調査対象者数が少ないことは否めない。そのため、今後はより詳細な聞き取り調査を行い、具体的な継続要因やスキル習得方法を明らかにする必要がある。

引用文献

市田啓啓 2012 リスク下における多次元人的資本投資のインセンティブ分析と自家保険としての個人比較優位の逆転 早稲田商学, 341, 727-796.
 加護野忠男 2007 取引の文化: 地域産業の制度的叡智 国民経済雑誌, 196, 109-118.
 金井壽宏・楠見 孝 2012 実践知—エキスパートの知性初版 有斐閣.
 岸 俊行 2011 運動技能における知識と技術の関連の検討 福井大学教育地域科学部紀要 (教育科学), 2, 211-224.
 北村勝朗 2008 スポーツ, 音楽, 芸術, 科学, わざ領域のエキスパートを対象とした熟達化過程の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 685.
 町田俊一・小林正信・宮 伸穂 1997 伝統的工芸品産業従事者の職業に対する意識 (1): 「南部鉄器」製造業における職人に対するアンケート調査 デザイン学研究. 研究発表大会概要集, 44, 13.
 田柳恵美子・平田圭二・竹川佳成・椿本弥生 2014 音楽演奏熟達化研究への一人称物語記述手法の導入 知識共創, 4, III5-1-III5-10.
 山田幸三・伊藤博之 2013 陶磁器産地の分業構造の変化と企業家活動—信楽焼産地の事例を中心として— 組織科学, 46, 4-15.

(受稿: 2015.12.10; 受理: 2016.5.7)